

群 教 セ	G01 - 02
	令 2.275 集
	国語一 小

語に着目して 作品を具体的に想像できる児童の育成

—登場人物の行動と生活経験を結び付けるウェビングを通して—

特別研修員 奈良 裕美

I 研究テーマ設定の理由

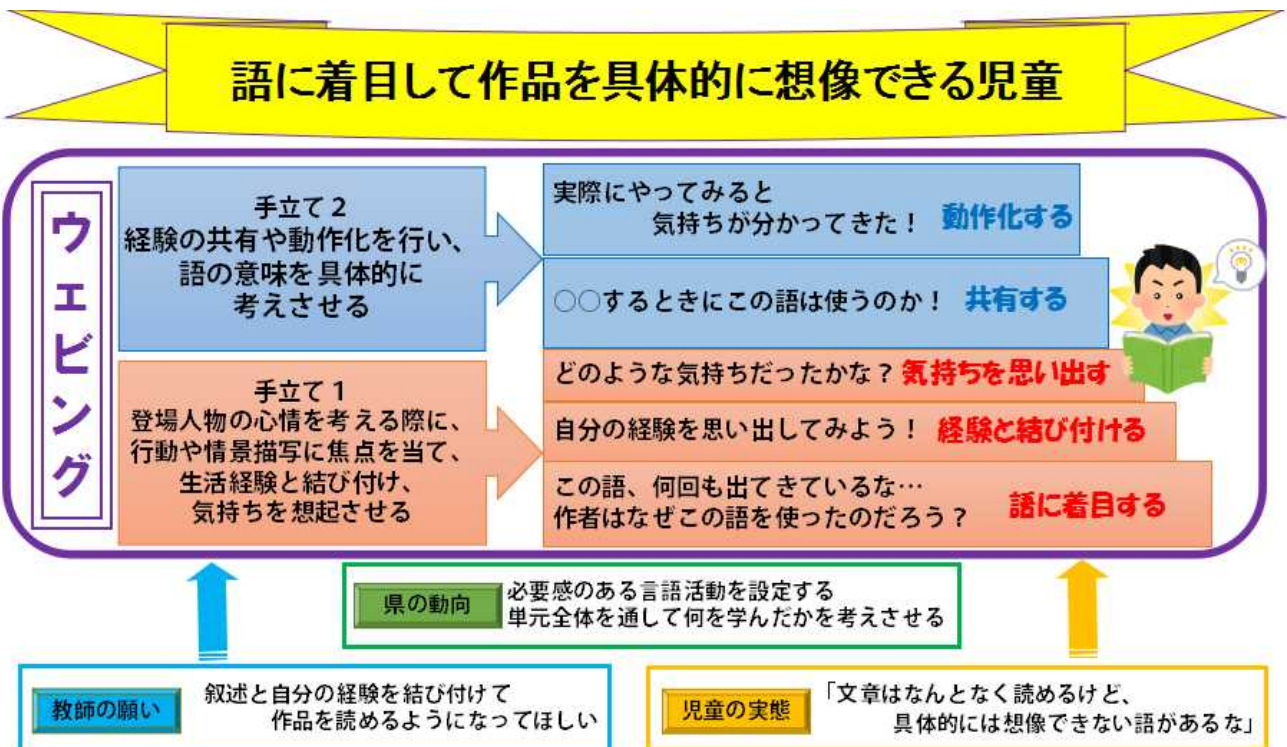
はばたく群馬の指導プランⅡには、国語科の単元のつくり方として「必要感のある言語活動を単元の課題として設定し」「単元を通して何を学んだかを再確認すること」とあり、学習の見通しをもち、自分の学びの変容に気付くこと、それを一般化させることで言語感覚を養わせることが求められている。小学校学習指導要領では、「知識及び技能」に「語彙」という事項が新たに設けられた。また、「読むこと」について「登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えること」が指導事項として示され、「様子や行動、気持ちや性格を表す語句」を「読むこと」を通して豊かにしていく必要性が感じられる。

本校の児童の多くは、時間的な順序や場面の様子、登場人物の行動を大まかに捉え、自分の考えや思いをもちながら文章を読むことができる。しかし、少ない語彙の中で理解したり説明したりしようとするため、細かな表現の工夫を捉えて作品を読み深めることに課題があると考えられる。このような児童の実態を踏まえ、生活経験と結び付けながら実感を伴って語や表現の工夫について考えさせることにより、叙述に沿って具体的に想像させたい。

そこで、文学的な文章の指導の中で、ウェビングを取り入れていくことによって、語に着目して作品を具体的に想像できる児童を育成していくことをテーマとして、上記のように設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

ウェビングを用いて登場人物の心情を考える活動について、以下のとおり構想した。

手立て1 登場人物の心情を考える際に、行動に焦点を当て、生活経験と結び付け、気持ちを想起させる

心情を考える際にポイントとなる登場人物の行動、作者が意図的に用いたと考えられる語を中心に置き、その語から想像される自分の経験や気持ち、または読書体験等から得たその語から想起されることを自由に書き出させ、生活経験と結び付け、気持ちを想起させる。

手立て2 経験の共有や動作化を行い、語の意味を具体的に考えさせる

児童にとって意味の捉えが曖昧だったり、普段の生活の中で使う機会が少なかったりする語について、動作化させたり、他者と経験を共有して自分の経験を振り返らせたりすることで、語のもつイメージを具体的に考えさせる。語の意味のイメージが広がることで思考が促され、自分の経験を振り返って、言葉で整理しようとする活動につながると考える。

本研究におけるウェビングとは、上記のように、行動や情景描写に焦点を当て、中心に置いた語から、児童自身の生活経験やその時の気持ち等を自由に書き出させ、それを基に登場人物の心情を具体的に考えさせるための思考ツールを指す。児童の生活経験には差があるため、読書体験や他の児童の生活経験の共有、実際に動作化させながら、語のもつイメージを広げ、その意味を正しく理解させる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 登場人物の気持ちを考える授業において、ウェビングを繰り返し学習に取り入れたことによって、繰り返し出てくる語や、登場人物の動作が具体的に書かれている語について考えることが、登場人物の心情を理解する手掛かりになるということに気付かせることができた。
- どの語に着目して読むとよいかを考えながら読むことができるようになったことにより、作者の意図を考えようとするにもつながり、作品の価値や作者の思いに迫ることができた。
- 登場人物の言動と児童自身の生活経験を結び付けて考えさせたことによって、登場人物の心情に寄り添って読み進めさせることができた。「ぼくも同じような経験をしたことがある」「私も同じ気持ちだった」という児童の振り返りから、共感的に作品を読み深めることができたと考えられる。
- 想起した生活経験を共有させたことで、自分の経験を振り返る手掛かりとなった。特に、書くことに苦手意識のある児童にとっては効果的であり、同じような経験をしたことがないか振り返らせ、書き始めるきっかけを作ることができた。

2 課題

- ウェビングにおいて、児童にとって意味の捉えが曖昧だったり、普段の生活の中で使う機会が少なかったりする語などを教師もしくは児童が選定した場合、思考が広がらないことがあった。経験の共有や動作化以外にも、同意語を紹介したり、その語を使う他の場面を紹介したりなど、他の手立ても必要であった。
- ウェビングで想起させた生活経験を基に、どのように叙述に戻らせ、読ませるべきか、ウェビングの活用について更なる工夫が必要である。

実践例

- 1 単元名 「場面をくらべながら読み、感じたことをまとめよう」
 教材名 「ちいちゃんのかげおくり」 光村図書（第3学年・2学期）

2 本単元について

本単元は、物語を読んで自分の考えをもち、それをまとめていく力の育成を目指すものである。また、教材を通して戦争や平和について考えるきっかけとなる単元でもある。単元で扱う教材「ちいちゃんのかげおくり」は、1行空きで場面が分けられており、その移り変わりが捉えやすい。また、「つぶやきました」「ぼつんと言う」「ひとりぼっち」「深くうなずく」などの登場人物の心情につながる行動の記述や「青い空」「赤い火」「くもった朝」など、色で表す情景描写が多く登場し、登場人物の心情について考えるヒントが散りばめられている。

以上のことから、本単元では児童が語に意識を向け、生活経験と結び付けながら読むことができるように、以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	場面の移り変わりや叙述を結び付けることを通して、次の指導事項が身に付けられるようにする。	
	(1) 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量が増えると、考えたことや思ったこと、場面の移り変わりが分かりやすくなることに気付き、語彙を豊かにすること。 (知識及び技能)	
	(2) 登場人物の気持ちの変化や情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること。 (思考力、判断力、表現力等)	
	(3) 言葉のもつよさに気付き、思いや考えを伝え合おうとすること。 (学びに向かう力、人間性等)	
評価規準	(1) 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量が増えると、考えたことや思ったこと、場面の移り変わりが分かりやすくなることに気付いている。 (知識・技能)	
	(2) 読むことにおいて、登場人物の気持ちの変化や情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像している。 (思考・判断・表現)	
	(3) 登場人物の気持ちの変化や情景について、粘り強く場面を想像し、言葉にこだわって思いや考えを伝え合おうとしている。 (主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・学習課題を設定する。
読解	第2時	・色を表す叙述に着目し、場面ごとの様子を整理する活動
	第3～6時	・場面ごとに、登場人物の気持ちと自分の経験を結び付ける活動
	第7時	・五の場面の役割について考え、話し合う活動
まとめ	第8時	・登場人物の気持ちの変化を座標にまとめる活動
	第9時	・感想を書いて読み合う活動

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全9時間計画の第6時に当たる。登場人物であるちいちゃんの心情を考えさせるために、ちいちゃんの行動に焦点を当てたウェビングを行い、児童自身の生活経験を想起させ、ちいちゃんの心情を具体的に考えさせる。そのために以下のとおり、手立てを具現化した。

手立て1 ちいちゃんの心情を考える際に、行動に焦点を当て、生活経験と結び付け、気持ちを想起させる

繰り返し出てくる語や、登場人物の動作が具体的に書かれている語という条件を与え、ウェビングで取り上げる語を選定する。そして、その語に焦点を当て、自分の生活経験やそのときの気持ちを自由に書き出させる。生活経験がない場合は、読書体験やその語のイメージなどを書くことも可とし、思考を広げさせる。

手立て2 経験の共有や動作化を行い、語の意味を具体的に考えさせる

本時では「ふみしめて立ち上がる」に焦点を当てたが、児童にとって意味の捉えが曖昧だったり、普段の生活の中で使う機会が少なかったりする語が選定された場合は、ウェビングを共有したり、動作化を取り入れたりして、思考の広がりをもたせる。その際には、語のもつ正しい意味から離れないようにウェビングをさせる必要がある。

4 授業の実際

(1) 前時までの学習について

児童は、1学期に教材「まいごのかぎ」で、文学的な文章を読む学習を、登場人物の行動に焦点を当て、ウェビングを使って心情を考える学習を行っている。

「ちいちゃんのかげおくり」においても、3回のウェビングを行い、登場人物であるちいちゃんの行動や気持ちに着目しながら、ちいちゃんへの手紙を書き、作品を読み深めてきた。

二の場面の学習の終末では、「経験していない行動だと(ウェビングが)書きにくいけど、経験したことだと書きやすい」と児童が振り返りをしている。「ひとりぼっち」は児童にとって経験したことがある語であり、そのときの気持ちも想起しやすかったため、思考の広がりが見られた(図1)。また、三の場面では、ウェビングで焦点を当てる語を児童が全体の話合いの中で選定することができるようになった(図2)。「深くうなずくが二回出てくる」「うなずくでもいいのに深くが付いている」という児童の発言から、繰り返し出てくる語や、作者が意図的に用いていると感じられる語を選ぶことで、ちいちゃん的心情に迫ることができると気づき始めた様子が見られた。

(2) 本時のウェビングについて

本時では、「ふみしめて立ち上がる」についてのウェビングを行った。語に着目して読むことができるようになってきている児童の実態を踏まえ、焦点を当てる語を示さずにいたところ、児童から「ふみしめて立ち上がる」がいいのではと提案があった。なぜ「ふみしめて立ち上がる」にしたのか問うと「立ち上がるでもいいのに、踏みしめてが付いているから」と理由を説明することもできた。

生活経験を想起する場面では、前時までの様子と比べ、児童は書きにくそうにしていた。なぜ書きにくいのかについても「意識してやったことがないから」とつぶやいていた。また、書き始めた児童も転んだ後の立ち上がる経験を想起する児童が多く、「ふみしめる」という語について、そのときの気持ちが広がらないでいた。そこで「頑張る」という気持ちについて触れている児童を紹介し(図3)併せて児童に動作化させることで、全体で語のイメージを共有する時間を作った。この活動によって、「踏みしめて立ち上がる」には「頑張る」という気持ちが必要だということ、四の場面においてそこまでしてちいちゃんが立ち上がったのは、家族に会いたい強い思いがあったのだということ全体で共有することができた。

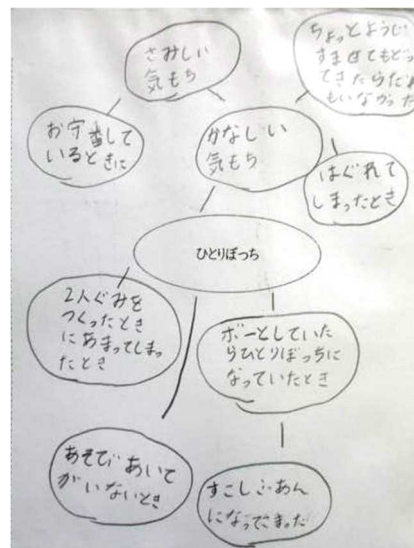


図1 本単元での最初の児童のウェビング

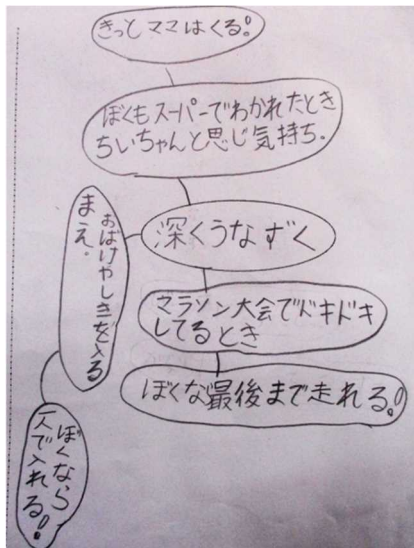


図2 前時の児童のウェビング

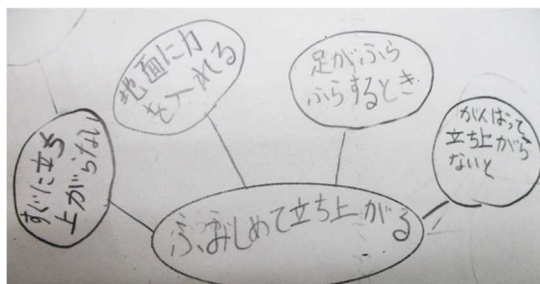


図3 全体で紹介した児童のウェビング

ウェビングを行った後、ちいちゃんへの手紙を書いた。「ふらふらする足でがんばって立ち上がるなんてすごいよ」「ふらふらする足をふみしめて立ち上がれる力があるから、ちいちゃんはすごい強いし…」など、ウェビングで焦点を当てた語を使いながら手紙を書いていた。

(3) 単元を終えての児童の感想について

単元を通してウェビングを手立てとし、場面ごとに読み取りを行った。そして、座標を使って場面のつながりを視覚的にまとめた。図4及び図5は児童の感想の一部である。

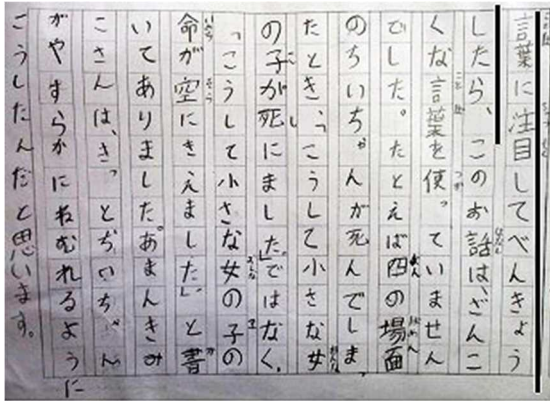


図4 単元を終えての児童の感想①

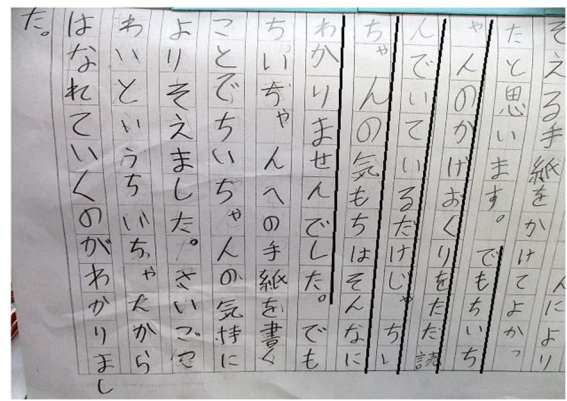


図5 単元を終えての児童の感想②

図4で示した傍線部より、語に着目して学習してきたという実感をもっていることが分かる。そして、作者が作品に込めた思いに迫ることができた。また、図5で示した傍線部より、ウェビングという手立てにより、語に着目して読むよさについて書かれていることが分かる。語に着目し、自分の生活経験と結び付け、気持ちを想起することが、登場人物の気持ちに寄り添いながら作品を読むことにつながった。

5 考察

文学的な文章の指導の中で、ウェビングを取り入れたことによって、児童は、語に着目して作品を具体的に想像することができた。図4の「言葉に着目して」という記述のように、児童は、文章の読み方の一つの方法を知り、その効果を実感することができたと言える。

児童はこれまで時間的な順序や事柄の順序、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えるために、繰り返し音読をしたり、動作化をしたりしながら作品を読み進めてきた。ここでウェビングにより自分の生活経験と登場人物の心情を結び付けながら読むことで、登場人物の気持ちをより深く考えるだけでなく、作品の価値や作者の意図にまで、迫ることができるようになった。図5の「ただ読んでいるだけじゃ」という記述からも、ウェビングによって想起された生活経験や気持ちを基に学習したことで、深い読みができた児童自身が学習を振り返ることができている。

また、ウェビングの実践により、児童の生活経験には大きな差があることを感じた。他の児童の生活経験を共有させたり、動作化したものを見て、視覚化された動作から改めて自分の経験を思い返したりさせることが有効である場合と、それだけでは語のもつイメージを正しく捉えることができない場合もあった。

今後、ウェビングによって語や表現の工夫に着目して読むことができるようになった児童に対して、次の文学的な文章では、作品を読み深めるために、ウェビングをどのように生かしていけばいいのか、説明的な文章を読むことの指導では、どのような手立てが有効なのかを考え、作品や文章を具体的に想像し、読み深める児童の育成をしていきたい。また、生活経験が乏しく、語のもつイメージを正しく捉えられない児童に対しては、同意語を紹介したり、その語を使う他の場面を紹介したりすることで、思考が広がっていくかを検証したい。